

会議録

日時	令和5年10月25日(水)14:00~16:00
場所	総合文化センター 視聴覚室
件名	令和5年度 第4回社会教育委員会定例会
出席者	社会教育委員：小栗正敏、加藤一哉、湯原定雄、渡邊啓介、松浦大哲、岩島留美子、安藤裕子、 有賀秀雄、伊藤孝一、浅沼克郎、有賀雅美 事務局：藤井志保(社会教育課課長補佐)、川畑篤仁(同主査)
議題	<p>1 挨拶</p> <p>2 協議 【グループ1】</p> <p>①学校運営協議会の年間の会議回数について</p> <ul style="list-style-type: none">・評価委員会の必要性について ⇒評価委員会として別枠で会を設定している学校と協議会の中で実施している学校がある。 どちらの形でも、必ず自分たちの活動を振り返ることを実施していればよい。 位置づいていない学校については、実施に向けて次年度以降取り組んでもらう必要がある。 どの学校でもPDCAのサイクルで検証ができていれば、会の位置づけ方は、学校によって違っていてもよい。・部会の必要性について ⇒会議ばかりではなく、部会での活動が多数行われれば、地域学校協働活動も活発になるのではないかと。 部会が少なくても、しっかりと位置づいていなくても、学校と一緒に活動をする組織がしっかりあれば、活動が滞ることはない。 まちづくりとの行事とのつながりが多い。まちづくりの中でも、学校と一緒に実施する行事について協議し、学校と連携をとっている。部会の回数よりも、部会で決めた活動を実施する組織とどのように練っていくのかの方が大切である。・会議の時間帯について ⇒協議会の後に部会をやって、拡大会議を一日でやると、会議時間は2~3時間になる。 全部を別にやると、集まらなければならない日数が増えるので、一日で協議会や部会や拡大会議を実施した方が集まりやすい。 実働の計画を立てようとするほど、時間の確保が必要になる。3時間ほどの会議時間を確保するには、昼よりも夜の方が確保しやすいのではないかと。 昼にしても夜にしても、実働の計画を具体的に立てようとするほど、時間の確保が必要である。

3時間の会議は、必要ない。会議時間は1時間半までだと思ふ。細部の活動計画については、関係団体と詰めていくことにする。協議会や部会等では、検討事項を焦点化して話し合う。検討事項の焦点化については、企画会等で事前に幹部で決定しておく。

②年間計画の主体

⑤学校と地域の行事調整方法

・学校や地域の各種団体等の年間計画の取りまとめについて

⇒各団体の年間行事予定を一覧にしたものがあるといい。

今まで通り、各地区公民館に全部集めてすり合わせをして、調整をしていくといい。各地区公民館にまちづくり協議会があり、公民館が核となるので、スムーズに調整しやすい。

地区公民館のない3地区では、その仕事を推進員さんや集落支援員さん一人に任せるのは大きな負担である。この3地区にも公民館主事のような人を配置してもらい、集落支援員さんや推進員さんと行事調整ができる体制を作るか、企画会を開いてそこで調整を図ってもらうか、調整委員会のようなものを開いてもらうかする。いずれにしても、公民館のない3地区には、大きな課題である。

③つながっている地域団体や組織

・より地域の人たちとつながっていく方法について

⇒総合的な学習の時間や地域学習での講師など、昔からの流れでつながりはある。

役員だけでなく地域の人が出席できる方法を考えていく必要がある。

(例)交通安全教室の自転車教室

交通安全教室での自転車教室では、交通安全協会の方だけでなく、より多くの保護者や地域の自転車屋さんなど、様々な方が関わっていけば、より子どもたちの安全を強化することができるし、大人も一緒に学ぶことができる。コミスクだからこそ様々な方を関わらせることができるようになってきている。

④ボランティアの募集方法

・今までは学校からだけだったが、コミスクが始まってからは学校からだけではなく、部会や公民館からも要請するようになってきた。

・地域と学校との協働での要請型：コミュニティーが中心になって募集、学校要請型：学校が中心になって募集、押しかけ型：自由に参加。押しかけ型が増えてくるといい。

・募集の広報の仕方を考える。何人出て下さいというお願いの仕方だけでなく、お手すきの方はいつでも来て下さいという募集の仕方の方が参加しやすい場合もある。年度初めにどの活動にどんなボランティアが必要なのかを地域に伝えるといい。

【グループ2】

①学校運営協議会の年間の会議回数について

・評価委員会の必要性について

⇒評価委員会は必要。評価委員会があり、客観的な評価があれば、より確かな活動につながっていくことができる。評価委員会のメンバーは委員会のメンバーと別の人がいい。自分たちでも評価をし、その内容を評価委員会で評価してもらう。

・各校区での委員会の回数等の違いについて

⇒校区によって、会議の名前も回数も異なっているが、それは異なってもいい。

会議をやることが目的ではなくて、会議は PDCA を回すための組織。地域の大きさが違うので、その地域の実態に応じた会議の回数や人数にし、持続可能な形で、効率よく PDCA を確実にしていく。

②年間計画の主体

③つながっている地域団体や組織

・どの学校も、いろいろな地域団体とうまく協働しながら、活動をより充実させている。

・各地域のまちづくり推進協議会とのつながりについて

⇒どの学校もまちづくり協議会と必ずつながっている。⇒まちづくり協議会とはまちの活性化のための組織。地域全体で子どもを育てていくとまちが活性化していくというメリットがある。

ただ、まちづくり協議会はコミスクの前からある組織。活動の起源はまちづくりであって、子ども育てではない。学校のために協力してやっていくということだけではなくて、学校と協働することで、地域の活性化につながっていくというメリットを活かす。

・地域と学校が協働して実施する活動のメリットの明確化の必要性について

⇒地域と学校が協働して実施する活動について、ただ年間計画に沿って活動を実施するだけでなく、その活動が互いにどのようなメリットがあるのかを明確にし、改善する必要がある。

今までも活動自体はあったと思うが、コミスクができたことで、学校と地域とのつながりという視点で活動をみることができるようになった。

地域と学校と子どもをつなげていくには、どこでどうすればいいのかをまちづくり協議会や学校、地域の諸団体が連携して考えるようになってきた。

コミスクが出てきたことをいいきっかけにする。子どもという視点で、まちづくり協議会や学校の行事を見直すことができるようになってきた。まちづくりにとっても、コミスクが行事を見直すきっかけになっていると思う。

横のつながりや縦のつながりがまだ明確になっていないところがある。学校と関わる諸団体とのつながりはできてきた。さらに地域に広げていくには、地域にとっての活動のメリットを明確にしていくことで活動が理解され、参加する人が増えてくる。

④ボランティアの募集方法

- ・地域から地域へ募集していることで、地域の人参加しやすくなっている。
- ・ボランティアに対する地域の方の理解を深めていく活動も必要である。
- ・ボランティアをしてくださっている地域の方の存在を子どもたちが実感できるような活動の仕方の工夫が必要である。

⑤学校と地域の行事調整方法

・年度末に来年度予定している行事について学校から文書が出され、その文書を参考に地域が行事を計画していく流れがスムーズにできている。

・関わる団体が広がれば広がるほど、行事の変更や中止に関する周知の仕方も工夫する必要

がある。

【全体交流】

1グループから	2グループから
①学校運営協議会の年間の会議回数	
<ul style="list-style-type: none">・協議会はあるけれど、部会はどれくらい活動しているのか。部会の活動が増えていくといい。・部会の中で、地域の方が子供と関わる場を増やしていくことを考えていけるといい。・協議会や部会、拡大会議等の時間を同じ日に設定している学校が多い。一つ一つの会議をさらに充実させていく工夫が必要ではないか。・まちづくり協議会の方が細部をサポートしてくださっている。	<ul style="list-style-type: none">・会議の数は違うけど、PDCA サイクルで活動する流れになっていれば、いいのではないか。・企画会があると効率よく学校運営協議会が始められるのではないか。・外部から評価してもらう評価委員会でより客観的に成果と課題を出してもらい、次年度に生かしていくといいのではないか。
②年間計画の主体	
⑤学校と地域の行事調整方法	
<ul style="list-style-type: none">・学校が主体となって、年間計画を立て、それを受けて、地域等が行事の計画を立てていくという流れがいい。 地区公民館がある地域とない地域で行事調整のしやすさが違う。地区公民館のある地域は、それぞれの団体の年間計画が公民館に集まってきて、公民館が一括してまとめている。公民館のない地域では、公民館がある地域のような役割を誰かがしなければならない。行事調整委員会のような委員会の立ち上げがあるといいのではないか。	<ul style="list-style-type: none">・学校の負担のこともあるが、最初に学校側から年間計画案を提示してもらった後に、企画会や協議会の委員や三部の部長等で調整し、それを地域に広げていく方が流れとしてスムーズである。
③つながっている地域団体や組織	
<ul style="list-style-type: none">・学校行事を通して繋がっている団体や組織が多い。地域として広がっていくのであれば、役員以外の保護者や地域の方が参加しやすい場を作り、子どもを通して色々な人がつながっていく方法を考えていく必要がある。	<ul style="list-style-type: none">・たくさんの団体に関わってもらっていて素晴らしいことだと思う。・学校にとってのメリットだけでなく、協力してもらった各種団体のメリットも明確にしていく。これを明確にして、伝えていき、地域に浸透させることで、コミスクが地域にとってもメリットがあることを理解してもらい、参加意欲につなげていく。

		<ul style="list-style-type: none"> ・まちづくり協議会との連携が大きい。まちづくりにとって学校との協働にどのようなメリットがあるのかをはっきりさせることが、学校運営協議会や地域学校協働の目的の達成につながる。
④ボランティアの募集方法		
<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの募集方法は3つある。(学校から募集、地域からの募集、自分から自主的に参加するボランティア。) ・自分から自主的に参加するボランティアとして、次の方法で実践している学校もある。 まず、学校からボランティアとしてどんな仕事があるのかを紹介し、それを受けて自分が参加したいボランティアに参加する。参加する際には、ボランティアノートに自分の名前を記名する。 ・ボランティアを集めるには、広報の仕方も工夫する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアに参加する人が参加するメリットを感じることができるよう、活動を工夫する必要もある。 	
<p>3 有賀代表より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新潟県小千谷小学校での地域ボランティア活動の紹介 ボランティアの種類からボランティアコーディネーターの役割、ボランティアの登録方法など、参考になる実践である。 <p>4 諸連絡</p> <p>5 閉会の言葉</p>		